

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

21世紀に入って急速なグローバル化が進む中で、先住民族や少数民族の文化が見直されているが、一方では、それらが消滅の危機に瀕していることも否定できない。本論文が研究の対象にしたモンゴル民族を代表する伝統芸能ホーリンウリゲルもそのひとつであるが、起源については諸説があり、定説を見ない。それに対して、本論文では、ホーリンウリゲルという芸能を構成する要素を定義し、従来の起源でなく、変容という視点で分析することによって歴史的な過程を動的に捉え、現状の課題を明確にし、将来の継承のために行うべき具体的な提案を述べた。21世紀になってホーリンウリゲルは非物質文化遺産に登録され、若手の研究が急速に進んでいるが、その中でも本論文は、学位申請者自身がこの芸能の伝承者であるという利点を生かして論述した点で、独創的な成果となっている。この成果は中国の伝統芸能研究に寄与するだけでなく、21世紀における先住民族や少数民族の文化の継承を考える上でも大きな意義を持つと考えられる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文は、ホーリンウリゲルが成立するための条件は、伴奏楽器のドウリボン・ウタスト・ホール（低音の四胡）、説唱脚本のウリゲル（長編の英雄叙事詩と歴史物語）、吟遊詩人のホールチ（演唱者）の3要素が揃うことであると定義した。従来の研究はその点を曖昧にしたままこの芸能の起源を論じてきたために、12世紀から13世紀に見る説から19世紀中期に見る説までさまざまであった。こうした起源説から脱却するために、変容という概念によって歴史的な過程を総合的に捉えることを可能にした。この成果によってホーリンウリゲルは、それが形成される過程を動的に把握することが可能になったので、これまでの起源説は大きな見直しを迫られると思われる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

ホーリンウリゲルに関する研究は、モンゴル国・ロシア・ドイツ・日本・ハンガリー・イギリス・アメリカ・韓国・フランスといった国外で進められ、中国国内では1949年に中華人民共和国が成立してから始まったという状況を踏まえ、その流れの中に本論文を位置づけた。新たな資料として、17世紀半ばに建てられた東部モンゴル地区最大の仏教寺院である瑞應寺に関する内部資料や郷土資料を収集し、さらに、内モンゴル自治区・吉林省・遼寧省・黒竜江省のホールチ（演唱者）・ドウリボン・ウタスト・ホール（四胡）制作者・視聴者・モンゴル語学校の教員・政府職員などにインタビュー調査を実施した。長く口承文化の中で息づいてきたモンゴル民族の伝統芸能を明らかにするために、関係者を訪ねて丁寧な調査を行い、これまで知られていなかった詳細な事実を明らかにした功績は大きい。文献とインタビューというふたつの調査を駆使しつつ慎重に論証を行ったので、指摘された事柄は的確であり、分析の結果も明快である。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか。

本論文の新しい知見は多岐にわたるが、なかでも、19世紀に瑞應寺にいたエンケテグスがホー

リンウリゲルの名作『興唐五伝』を創作したこと、それを受けたダンスソニマが2人の弟子を取ってホーリンウリゲルの普及に努め、各種の流派が発生したこと、20世紀になって、ウリゲルインゲル（説書館）という専用の施設が盛んに建てられ、ホルーチ（演唱者）と視聴者が急増したこと、しかし、文化大革命を経て、社会環境が変わって娯楽が多様化し、ホーリンウリゲルに対する関心が薄れてきたこと、21世紀になって、ホーリンウリゲルは非物質文化遺産による保護と保存の中に置かれたこと、さらに、ホーリンウリゲルを漢蒙双語教育を試みる学校教育の中に位置づけて継承する実践が始まったことを述べた点は、特筆すべき指摘になっている。従って、本論文で述べられた研究の成果は学術的な水準に十分に達していると評価することができる。

（5）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

学位申請者は、自身がホーリンウリゲルを家系で継承する5代目のホルーチ（演唱者）であり、父親は国家伝承人に登録されている。非物質文化遺産への登録は、この芸能の価値が広く承認されたことを意味するが、同時に、この芸能が消滅の危機にあることを意味する。そこで、実践的な伝承者としてだけでなく、国際的な視野を持った研究者として、この芸能の継承を理論的に構築したいと考えている。幼いときからの生活環境もあり、この研究を推進するために多くの関係者が協力を惜しまず、そうしたことによってこの芸能を内部から総合的に捉えることができたのは、本論文の独自性であると言っても言い過ぎにはならない。中国における少数民族の伝統芸能の歴史と現状を明らかにしただけではなく、国際化と情報化が急速に進む時代にあって、世界の伝統芸能の未来を考えるために重要な示唆を提供している。従って、本論文は学位を取得するにふさわしい内容であることはもちろん、国際的な意義を有する成果であると判断される。

以上の点を総合的に評価して、審査委員5名は全員一致で、本論文は東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（学術）の学位を授与するにふさわしい内容を持つと判定した。